

見本

令和 2 年 度

芸術文化学部 芸術文化学科

推薦入試・帰国生徒入試・社会人入試

小 論 文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題は、全部で6ページ、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚である。試験開始の合図があつてから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入すること。
- 5 配付された問題冊子および下書用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
11.27
富山大学

見本

次の文章は、橋本治『「わからない」 という方法』の序文である。文章を読んで、後の問に答えなさい。

本書のタイトルは、『「わからない」 という方法』である。

しかし、「わからない」などということが、果たして「方法」となりうるのだろうか？ 人は普通、「わからないから方法を探す」のであって、「わからない」ということを「方法」にはしない。だいたい、そんなものが「方法」になるはずはない。ところがしかし、人に「あなたの方法論は？」と問われて、それに答える自分を振り返ると、私はいつも、「だってわからないから」と言っているのである。

「あなたはやたらといろんなことをやってるでしょ？ あまりにもいろんなことをやりすぎて、正体不明みたいなもんでしょ？ 書いてるジャンルはバラバラに近いようなもんだし、文体も平気で違うでしょ？ 昔はセーターの編み方の本なんか出したでしょ？ 古典の現代語訳とかもいろいろやってるでしょ？ どれも普通じゃないでしょ？ 時評みたいなことも平気でやるでしょ？ 小説家が本業だなんてことは、ほとんど忘れられてるでしょ？ 演出家だってやったでしょ？ どうすればそんなにいるんなことがやれるんですか？」などと問われると、「うーん……」と考えながら、私の頭には「方法」などというものが思い浮かばない。「なぜいろいろなことができるのか？」と問われているくせに、「なぜいろいろなことをやるのか？」と、その「理由」を問われているような気がしてしまうのである。

「なぜそんなにもいろんなことに手を出すのか？」ということになれば、その理由はいったって簡単である。「わからないから」である。「わからないからやってみよう」とか、「こんなにも「わからない」と思ってしまった以上、自分のテーマにするしかないな」などと思う。

たとえば、「かくかくしかじかのテーマで文章を書いてほしい」という依頼が編集者からあって、「ついでに、一度お会いして——」ということになって打ち合わせめたことをする。会うくらいだから、そのテーマに関心がないわけではない。ないけれどもしかし、よくわかっているわけではない——もう少し正確に言えば、「よく知っているわけではない」。だから、その「打ち合わせ」と称するものの話の中身はバラバラなのだが、それで「書く」と決めた場合の私の答は、だいたいがところ、「じゃ、わからないから書いてみます」になっているのである。気がついたら私の場合、「わからないからやってみる」と、「わからない」を「方法」にしてしまっているのである。

「わからないこと」を書けるわけがない。そんなことをしても、文章がまとまらない。しかしある部分では、「わかる」というような気がする。「わかるような気がする」という断片がいくつもフワフワと漂っていて、それが一つにまとまらない。なぜまとまらないのかと言えば、全体像が「わからない」からである。「わからない全体像」は、まとめようがない。「わからない」だからわからないのである。しかし、この「わからない」の全体像をまとめる方法が一つだけある。それは、「自分はどのようにならないのだろうか？」と考えることである。

全体像が見えないのは、それをまとめる「方向」が「わからない」からである。「方向」が一つにならず、あちらこちらに散乱している。だから、「一つの全体像」にはならない。つまり、その散乱する「方向」を一つにしてしまえば、これはまとまりるのである。

「方向」が散乱しているのは、思考の途中で、「わからない」という表示がいろいろな局面に登場してしまうからである。途中までは「わかる」ような気がしていて、でもその道筋を行くと、すぐに「わからない」という行き止まりになる。「わからない」で寸断された迷路の中をあっちこっちさまよっているから、「方向」が一つにならない。しかし、その「行き止まり」を示

している「わからない」を生み出すのは、「自分の頭」なのである。さまざまな「わからない」はあつたとしても、その「わからない」は全部、「自分の頭」という一つのものに由来しているのである。そう思った時、「方向」は一つになりうる。つまり、「自分はどう、わからないのか？」を考えてしまえば、さまざまの「わからない」が、全部「自分の頭」という一つのところに収まってしまふからである。

「自分はどうわからないのか？」——これを自分の頭に問うことだけが、さまざまの「わからない」でできあがっている迷路を歩くための羅針盤である。「自分はどう、わからないのか？」——それこそが、「わかる」に至るための「方向」である。その「方向」に進むことだけが、「わからない」の迷路を切り抜ける「方法」である。「自分はどうわからないのか？」——これを自分の頭に問う時、はじめて「わからない」は「方法」となるのである。

私には、「わからない」と思うことがいくらでもある。そういうことを一つ一つぶして行くのが人生だと思っているから、やることはいくらでもある。つまりは、人生とは「わからないの迷路」である。だから、そのさまざまに存在する「わからない」を、まず整理しなければならぬ。「木を見て森を見ず」とは言うが、「わからないの迷路」に圧倒されているだけの人間は、その逆の、「森を見て木を見ず」なのである。

巨大なる「わからないの森」は、その実、「わかりうる一本の木」の集大成なのである。だからとりあえず、「わかりうるもの」を探す。手をつけるべきは、「こんなくだらないものの答が全体像の解明につながるはずはない」と思えるようなところである。「くだらない」——だから「どうでもいい」と思って放り投げてしまうのは、それを「わかりきっている」と思うからである。つまりそれは、「わかる」のである。「わかる」は、「わからない」を解明するためのヒントである。つまりは、「くだらない」とか「どうでもいい」と思われるものには、「わかる」へ至るためのヒントが隠されているということである。

とりあえず「わかる」——どうでもいいようなことでも、とりあえず「わかる」と思えるようなことを確保する。それである。たは、「わかっている」のである。なにかが「わかる」になれば、「わかる」とはどのようなことか」という理解が訪れる。それがつまりは、「方向の発見」である。

「わからない」をスタート地点とすれば、「わかった」はゴールである。スタート地点とゴール地点を結ぶと、「道筋」が見える。「わかる」とは、実のところ、「わからない」と「わかった」の間を結ぶ道筋を、地図に書くことなのである。「わかる」ばかりを性急に求める人は、地図を見ない人である。常にガイドを求めて、「ゴールまで連れて行け」と命令する人である。その人の目的は、ただゴールにたどり着くことだけだから、いくらゴールにたどり着いても、途中の道筋がまったくわからない——だから、人に地図を書いて、自分の通った道筋を教えることができない。「わかった」の数ばかり集めて、しかしその実「なんにもわからない」のままではいるのは、このような人である。

「わからない」は、スタート地点である。これをゴールにすると、「行き止まり」になってしまう。「わからない」がスタート地点で、「わかった」がゴール。「わかる」は、その間をつなぐ道筋である。しかし人は、往々にして、「わかる」をスタート地点にしようとする。「わかった」がゴールなのだから、「わかる」をスタート地点にしても、どこへも行けない。「わかる」をスタート地点とした時、その先の道筋はすべて「わからない」になり、その道の先は、やはり「わからない」の行き止まりである。そういうものであるにもかかわらず、人は多く、「わかる」をスタート地点に設定しようとする。

「わかる」をスタート地点にしようとする人は、一度「わかった」のゴールへたどり着いて、そしてそのまま、新たなるレースへ出ようとはしない人なのである。「自分は一度『わかった』のゴールにたどり着いた。そんな自分には、いまさら『わからない』のスタート地点に立って、めんどくさいレースを始める理由などない」と思っているから、「わからない」という前提に

立たない。「自分は一度勝者になった」と思うから、面倒なレースを拒否して、平気でガイドを求める。常にガイドを求めて、自分からはなにもしない。つまり、「わかる」をスタート地点にするということと、「傲慢なる恥知らずを省みない」とは、一つなのである。

「わからない」は、思索のスタート地点である。そこから始めればこそ、「わからない」は思索の「方法」となる。「わからない」からやめた」であきらめれば、そこは挫折のゴールである。「わからない」が「方法」になるかどうかは、それを「方法」として採用するかどうかの、決断にかかっているのである。

私には、「わからない」と思うことがいくらでもある。そういうことを一つ一つぶして行くのが人生だと思っているから、やることはいくらでもある。そのいくらでもある「わからないこと」を、どれから片づけて行くかは、その時その時の優先順位によるものである。その優先順位とはつまり、「その時になにが一番“わかりやすそう”に見えたか」である。「どれから手をつけるか？」は、その時その時によつて違うけれども、「なぜやるのか？」の理由だけは動かない——「わからないから」である。

「わかっていること」に対しては、あまり食指が動かない。「あ、そういうことはよくわかんないから、解明できたらおもしろいぞ」などと思つて、「わからないこと」を、テーマとして選択する。もしかしたら、人はあまりこんな考え方をしないのかもしれないが、私はそのような考え方をする人間なのである。そういう人間に「あなたの方法論はなんですか？」などと尋ねたら、「“わからない”が私の方法論です」という答にしかならないだろう。そう思つて私は、ここに図々しくも、『わからない』という方法』などと題する本を存在させてしまふのである。

見本

問一 筆者が物事に取り組み際の方法について、一五〇字程度で説明しなさい。

問二 筆者の考えを踏まえ、あなたが物事に取り組み際に、何を重要だと考え、どのような関心を持って、どのような方法をとるのかについて、これまでの経験と学習の具体例をあげながら、六〇〇字程度で述べなさい。

見本

令和二年度 芸術文化学部 芸術文化学科

(推薦入試・帰国生徒入試・社会人入試)

科目
小論文

解答
用紙

総点

受験番号

問一

Grid for question 1 with a triangle marker at the 150 character position.

200 150 100 50

問二

Grid for question 2 with a triangle marker at the 600 character position.

700 600 500 400 300 200 100

▲は目安文字数の位置を示す。

見本

下書用紙